

## 第1回

平成26年度  
学習院中等科入学試験

## 国語

時間 8:40 ~ 9:30

国  
A

## 〔注意〕

1. 試験中は受験票を机の左上におきなさい。
2. 机の上には筆記用具（えんぴつ、シャープペンシル、消しゴム）と受験票以外は出してはいけません。
3. 解答はすべて解答用紙に書きなさい。
4. 始めの合図があるまでは問題を開いてはいけません。
5. 問題の内容についての質問は受け付けません。
6. 試験の終了はチャイムの鳴り始めです。
7. 用がある人は静かに手をあげなさい。
8. ページがぬけていたり、印刷が読みにくかったりした場合は先生に申し出なさい。
9. 試験が始まったら、問題のページ数をたしかめなさい。問題は1ページから12ページまでです。
10. 字数が決まっている問いについては、「、」や「。」も一字と数えます。

—  
次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

次の文章中の「ぼく」（木村）は、成績優秀（ゆうしゅう）で所属する野球チームではエースでキャプテンである。以下の文章は、「ぼく」が投げている野球の試合の場面である。なお、本文中に登場する「今泉」は最近転校してきた監督（かんとく）の甥（おい）である。

二点をリードした最終回①ウラ、ぼくは先頭バッターにライト前ヒットを打たれた。盗塁（とうるい）を警戒（けいかい）しながら次のバッターへの投球（とうきゅう）をつづけ、カウントがツーボール・ワンストライクになったところで、深沢監督が立ちあがってタイムをかけた。プレートを外してベンチを見ると、監督はぼくに向かって手まねきをしていた。試合中にベンチによばれるなんて②ケイケンがなかったぼくは、とまどいながら小走りで監督の前へ急ぎ、帽子（ぼうし）を取った。

「木村」

深沢監督は細い目でぼくをにらんだ。相手のピッチャーがさつき見せた目によく似ていると思った瞬間（しゅんかん）、バシッというにぶい音がした。

真上からふりおとされた監督の右手の衝撃（しょうげき）で、ぼくの首は前に倒（たお）れた。下顎（したあご）がユニフォームの第一ボタンにあたって跳（は）ねかえった。わけがわからないまま顔を上げると、監督の右肩（かた）ごしにお母さんの顔が目に入った。お母さんは口を半開きにして呆然（ぼうぜん）としていた。その隣（となり）にいる浩司のお母さんもまったく同じ表情だった。

「もつと腕（うで）をふらんか！」

絞（しぼ）りだすような大声だった。

ぼくは、深沢監督と目をあわせるのが精一杯だった。

「わかったか！」

「（１）……はい」

「わかったのか！」

「はい！」

わかるも何も、何かなんだかまったくかんがえられないまま、ぼくは大声で返事をした。

「行け」

監督に頭を下げ、はつきりとしびれを感じる頭に帽子をかぶせて歩調を早め、涙（なみだ）がにじみはじめた目を誰（だれ）からも見られないよう注意しながらマウンドに立った。

正午を知らせるサイレンが遠くで鳴り響（ひび）いた。

ぼくは汗（あせ）をぬぐうふりをして右の手首で涙をかき消した。

頬(ほお)をかすめて風が吹きぬけた。

グラウンドにいる全員がぼくを見ていた。

赤ん坊(ぼう)の泣く声がどこからかすかに聞こえるほかには、まったく音がなかった。相手のバッターもベンチに座る選手も、こちらの守備陣(じん)もベンチの補欠選手も、両チームの父母による応援(おうえん)団も、バックネットウラで観戦している大人や子どもも、審判(しんぱん)も、無言でぼくだけを見ていた。全校生徒が集まって校長先生の話の聞くとときよりも、(2)はるかに静かだった。

しびれた頭はどくどくと脈打ち、頭蓋骨(ずがいこつ)の\*尖端(とつたん)の痛みは側頭部(そくとうぶ)へもひろがっていた。頭全体と耳と目のまわりが熱く、心臓は頭部に負けないほど高鳴っていた。一瞬でも油断すれば、その場にへたりこんでしまいそうだった。ぼくは表情を変えずに歯を食いしばってボールを拾い、ゆっくりとセツアップの体勢に入った。

「プレーボール」

審判が声を張りあげた。ぼくは唇(くちびる)の隙間(すきま)から細く長い息を吐(は)いて③コキユウを整え、キャッチャーにサインを求めた。キャッチャーの山田はあわててマスクをかぶり、せまい股間(こかん)に人さし指をつきだした。ぼくはうなずいて体を起こし、一塁ランナーを目で\*牽制(けんせい)して投球動作

に移った。

深沢監督にたたかれる前よりも自分の腕がよく振れているのか、ぼくにはわからなかった。ぼくが投げたボールは山田がかまえた外角低めを外れてど真ん中へ行ってしまったけど、バッターはまったく動かなかった。あつさりストライクを見送ったバッターはバッターボックスから出て素振りをし、ヘルメットをいじりながら中にもどると、ぼくと目をあわせた。ぼくはまばたきせずにその目を見返した。

目に映るすべてに深沢監督の顔がちらつき、**「A」**。バッターにも、山田のミットにも、審判のマスクにも、バックネットの編み目にも、傷だらけのプレートにも、監督の不機嫌(ふきげん)な顔がまわりつく。

次のボールは山田がかまえた位置より少し外側にそれたけど、ミットからは鞭(むち)を打ったようなキレのいい\*捕球音(ほきゅうおん)が響いた。ぼくは投げおえた体勢のまま審判をにらんだ。ふつふつとわいてきた深沢監督への怒りが、目からこぼれ落ちそうだった。

「ストライク」審判の右手があがった。「バッター、アウト!」すぐに相手のベンチや応援団からは判定への不満がもれた。ふざけんな、とぼくは思った。どこにも逃げ場のない試合中のグラウンドで、敵も味方も観客も見守っている中でいきなり頭をたた

かれ、それでもおれはこうして投げてるんだ。こんなはずかしい思いをしながら全力で投げた球が、ボールにされてたまるか。

ぼくは(3)相手ベンチを罵(ののし)りたい思いをぐっとおさえ、さりげなく帽子の鰐(つば)の位置を直して山田の返球を受けとった。そして、次のバッターをピッチャーゴロのダブルプレーで打ちとり、二対〇で勝利をおさめた。

試合終了(しゅうりょう)後、深沢監督はベンチの前にメンバー全員を集め、二時から始まる決勝戦に備えて、軽い食事を一時までに終えるよう指示した。ぼくと浩司は昨日と同じ場所へ移動し、そこで待っていた浩司の両親と妹とぼくのお母さんといっしょに、サンドイッチとヨーグルトを食べた。

大人たちも浩司も、相手ピッチャーのピッチングを話題にしてすごし、ぼくが(4)監督からたたかれた件についてはひと言もふれなかった。浩司の妹はぼくと目があうのをさけるようにうつむき、黙々(もくもく)とサンドイッチをほおばった。ぼくはぼくでも何もなくあったようにみんなの話に加わり、しばらくすると、「缶(かん)コーヒーを買ってくる」と言ってその場を離(はな)れた。

移動する間、ぼくは目をふせて歩いた。(5)視線が怖(こわ)かった。うつむいたまま少しずつ歩幅(ほはば)をひろげて急ぎ、父母たちに開放されている駐車場(ちゅうしゃじょう)を横ぎって

いつもの自動販売機(はんばいき)の前で顔を上げ、ぼくは二番目に苦い缶コーヒーを選んだ。

「大変だったね」

五月一日から冷たくなった缶コーヒーを取り上げて振りかえると、今泉が立っていた。今泉は白いシャツに紺(こん)色の半ズボンに身につけ、なぜか黄色いナップサックを背負っていた。

「あんな場面で選手をたたくなんて、ありえないよね」

今泉は、ぼくが退(ど)くのを待って自動販売機に百円硬貨(こ)うか)を入れ、ブラックコーヒーのボタンを押(お)しこんだ。「あそこでタイムを取るのはいいタイミンだったと思うけど、どうして④ポウリョクを使うかな」今泉はプルタブをあけてひと口飲んだ。「話せば伝わることなのに」

ぼくは返事に困ってうつむき、プルタブを押しあげた。今泉は自分の気持ちを⑤ダイベンしてくれていると思ったけど、それはもう起きてしまったのだ。時間を巻きもどせない以上、あの試合にかかわった人々は、大人も子どももみんな、試合中に思いつきたたかれたぼくの姿を忘れない……。

つい、ため息がもれた。微糖(びとう)のコーヒーを口にふくんで顔をあげると、今泉はブラックコーヒーを飲みきっていた。「\*選ばれてあることの、恍惚(こうこつ)と不安と、二つわれにあり……って気分?」

今泉と目があってぼくはむせた。コーヒーが⑥キカンシに入って苦しく、背中を丸めながら咳(せ)きこんだ。

「ごめんごめん」

「だ……だいじょうぶ」

ぼくは顔の前に手をあげ、今泉がさすりかけた背中を伸ばした。

「受験用の国語の⑦サンコウシヨを見てたら、ヴェルレエヌの簡単な紹介(しょうかい)があつて、そこに有名な作品の一節として載(の)つてたんだ。ぼくたちが初めて話したとき、木村君、ヴェルレエヌのこと質問してきたから、つい」

返事をしようとしても声がかすれ、ぼくはしかたなく黙(だま)つてうなずいた。今泉は空になった缶を⑧センヨウのゴミ箱に捨て、左の首首に巻かれた腕時計を見た。

「強豪(きょうこう) チームのキャプテンもつとめるエースで、しかも児童会の会長の木村君は、この学校では、たぶん、選ばれた人間だからね」

ぼくはまた咳きこみ、首を横に振ってみせた。

「(6) そんなこと、ないよ」

「いや、木村君も自覚しているはずだよ。ヴェルレエヌの詩の一節を読んだとき、すぐにぴんときた。木村君はこの詩を知ってるって。そして、自分の気持ちをこの詩に\*投影(とうえい)してるって」

「(6) だから、そんなことないって」

「帰るのか？」

「うん、東京の家にね」

「東京？」

「明日、東京で模擬(もぎ)テストがあるんだ」

「大変だな、中学受験も」

「(7) でも、木村君みたいにみんなの前でたたかれることはないから」

「もう言わんとして」

先に笑った今泉を追いかけるようにぼくは苦笑した。

「ごめんごめん。でもね、木村君たちはきつと優勝すると思う」

「なんでそう思うの？」

「あれだけはずかしい目にあつたんだから、もう怖いものないじゃん。木村君、伯父(おじ)さんを殴(なぐ)りかえすぐらいの勢いで腕を振って投げてると思うんだ。ぼくは野球にくわしくないからよくはわからないけど、試合が終わったら、木村君には恍惚の瞬間がやってくる予感がする」

ぼくは苦笑したまま今泉を見つめ、【 C 】、と思った。

ヴェルレエヌの詩とからめてうまくまとめたつもりだろうけど、おれが一番怖いのは修学旅行のおねしょなんだよ。

「じゃあ、がんばって」

今泉は軽く左手をあげ、名前を思いだせないアイドルそっくりの

「自分が選ばれてあると思うことは、別にはずかしいことでも、悪いことでもないよ。ぼくだってたまにはそう思うもん。選ばれた人間だから、こんな不安定な毎日を送らされているんだって」

今泉はそう言つて笑顔になった。その顔は、やっぱり名前を思いだせないアイドルによく似ていた。ぼくは缶コーヒーを口にくくみ、慎重(しんちょう)に飲みほした。

「この町で暮らすのは、そんなに不安なのか？」

「まあ、いろいろね。でも、それより、母親のこだわりや、父親の生き方に影響(えいきょう)されてしまう自分のこれからをかんがえると、どうしても不安になるんだ。ぼくはどうしようか、どんな選択(せんたく)をすればいいのかって」

「選択？」

「何を選びとるか……」

「それは、将来の話？」

「そうだね」

「将来のことをかんがえると、いつも不安になるよな」

「不安のない将来なんて、きつとないんだよ」

ぼくは微笑(ほほえ)む今泉に見入った。【 B 】顔だった。

「じゃあ、そろそろ」

今泉はちらつと時計を見た。

笑顔を残して歩きだした。ぼくは残りの缶コーヒーをちびちび飲みながら、その後ろ姿を見送った。今泉は一度も振りかえらなかつた。

長蘭安浩の文章による

\*突端 突き出た先。

\*牽制 ここでは走者の様子をうかがい、自由に行動できないようにすること。

\*捕球音 ボールを取った時の音。

\*選ばれてあることの、恍惚と不安と、二つわれにあり フランスの詩人であるヴェルレエヌの詩の一節。恍惚とは、ここではうつとりとする様子。

\*投影 映し出すこと。

問一 ぼう線①から⑧のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問二 波線(一)を音読するとき、どのように声に出して読むのが良いですか。読み方として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 反発するように勢いよく読む。

イ 内容を聞き返すように語尾を上げて読む。

ウ とまどう様子で小さな声で読む。

エ 監督にこびるようにゆっくり読む。

オ 理解したことがわかるようにはっきりと読む。

問三 波線(2)について、なぜ静かだったのですか。最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 急に監督が「ぼく」をたたくという、予想もしなかったことが起こり、驚いているから。

イ 大人が子どもをたたく場面を見て、不快な気持ちになっているから。

ウ ヒットを打たれた「ぼく」が次にどんな投球をするか不安ながらも楽しみに待っているから。

エ 気持ちが高ぶっていて、周りの音が聞こえない状態に「ぼく」がなっているから。

問四 「 A 」に入る言葉として最も適当なものを、次から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア とても反省した

イ うれしく思った

ウ とまどった

エ 腹が立った

問五 波線(3)の時、「ぼく」はなぜ罵りたいと思ったのですか。四十文字以上五十文字以内で書きなさい。

問六 波線(4)の理由を簡潔に書きなさい。

問七 波線(5)は、誰からのどのような視線が怖かったのですか。四十文字以内で書きなさい。

問八 波線(6)で、同じ言葉をくり返している「ぼく」はどのような気持ちであったとかがえられますか。二十文字以上三十文字以内で書きなさい。

問九 「 B 」 「 C 」に入る言葉として最も適当なものを、それぞれ次から一つ選び、その記号を書きなさい。

当なものを、それぞれ次から一つ選び、その記号を書きなさい。

B ア おかしくて大笑いしそうな

イ 不安などまったくなくような

ウ さびしさに満ちたような

エ とまどいを隠(かく)せないような

C ア するどい

イ その通り

ウ あまい

エ 面白い

問十 波線(7)で、今泉はなぜこのようなことを言ったのですか。最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。

ア 「ぼく」を上げますために、あえて監督にたたかれたことを茶化そうとしたから。

イ 自分の中学受験の大変さが分かっていない「ぼく」に腹を立てているから。

ウ 自分の伯父である監督にたたかれたことを忘れているような「ぼく」を注意しようとしたから。

エ もはや笑い話になった監督にたたかれたことを話題にして、「ぼく」とさらに仲良くなろうと思ったから。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私は、東京の池袋から①シテツで二駅ほど行ったところの住宅地で生まれ育ちました。幼稚園（ようちえん）や小学校のときは、家は小さくても庭があり、アゲハチョウやアブラゼミをはじめとして多くの昆虫（こんちゅう）がおり、また花も植えられていました。

小学生の足でも五分とかならない小学校への通学途中にはキャベツ畑やネギ畑などがあり、モンシロチョウが舞（ま）っていました。

私は小学校四年のときにひっこし、その後、東京の生まれ育った場所にもどってきたのは七年後の一七歳（さい）になったころでした。その七年間で、私のきおくにあった畑のほとんどが狭（せま）い敷地（しきち）にぎゅうぎゅうに押（お）しつめられた、ビンづめのアスパラガスのようにアパートが建つ住宅地か駐車場（ちゅうしゃじょう）へと変容（へんよう）してしまっていました。

初夏になると、むしろ気持ち悪いぐらいに葉っぱについていたアゲハチョウの幼虫は、ほとんど見られなくなっていました。モンシロチョウもいなくなり、土はなくなり、アスファルトがそれにかわっていました。小学生のころは、家にしょっちゅうくるスズメをどうにか捕（と）れないか、といういろいろかんがえたり試したりしていたのが嘘（うそ）のように、スズメは消えていました。

小学生のころは、クーラーのような気のきいた文明の②リキはま

だ家にはなかったので、気候の変化などをより身近に感じる事ができました。とうぜん夏は暑かったですが、隣（となり）近所の家もクーラーがなかったもので、いまのようにクーラーから出る熱風もなく、夕暮れ時に吹（ふ）く風を頬（ほお）に感じながら、縁側（えんがわ）でスイカをほおばっていたら、涼（すず）しさを覚えたものです。

しかし、久しぶりにもどってきた東京の家は、どこの家もクーラーを③セツチしており、クーラーの排熱（はいねつ）が屋外をさらに暑くし、家にこもってクーラーで涼むしかなくなりました。クーラーの涼しい空気の中で食べるスイカは、以前にくらべると、

【 A 】。

東京では、東京オリンピックが開催（かいさい）された一九六四年前後から、多くの川が暗きよ化されていきました。暗きよ化というのは、川にフタをしてしまうことです。フタをされた川は、日光を浴びることがなくなり、生物が住みにくくなります。そして、なにより、そこに川が流れているということを人々は忘れ去（す）てしまっています。

「春の小川」という④ショウカを、きみたちも知っているのではないかと思います。

春の小川は、【 B 】 行くよ。

岸のすみれや、れんげの花に、

すがたやさしく、色うつくしく、

咲（さ）けよ咲けよと、ささやきながら。

春の小川は、【 B 】 行くよ、

えびやめだかや、こぶなのむねに、

今日（けふ）も一日、ひなたでおよぎ、

遊（あそ）べ遊（あそ）べと、ささやきながら。

春のおだやかな日ざしの中、レンゲの花が咲き誇（ほこ）り、多くのエビやメダカ、小ブナが川を泳いでいるのどかで美しい田園風景が思い描（えが）ける歌です。この小川のモデルが、東京を代表する繁華街（はんかがい）である渋谷（しぶや）を流れる、宇田川の支流の河骨川（こうほねがわ）であると聞けば、驚（おどろ）くでしょう。渋谷区代々木には、歌碑（かひ）も建っています。この河骨川は一九六四年に暗きよ化されてしまい、私たちはその川がどこを流れているのかさえ知らないだけでなく、（1）川が存在していることすら忘れてしまっています。しかし、高野辰之（たかのたつゆき）作詞の「春の小川」が発表されたのは一九二二年。一〇〇年ほど前までは、渋谷のちよつと外れに、このような豊かな自然のあふれた、のどかな風景が存在していたのです。

東京が都市として発展していく⑤カテイで、多くの川は下水道として利用されるようになります。その結果、メダカや小ブナが生息するような環境（かんきょう）ではなくなり、多くの生物はいなくな

なり、また汚臭（おしゅう）を発するようになります。

【 C 】という言葉どおり、臭（くさ）くなった川にフタをしたのです。その当時、そのような処（ところ）を求めた人々も多かったでしょう。しかし、その結果、人々は川の存在を忘れ、日々の生活から自然が遠のいてしまいました。

川が流れていると、両岸に木が植えられます。東京の桜の名所は川べりにありますが、フタをされた川の跡（あと）に桜がそのまま残っている場合もあります。川にフタをされたしまった桜の木は、主人をなくした犬（いぬ）のようで、どこか頼（たよ）りなげであり、

【 D 】ものがあります。桜はアスファルトには似合いません。桜を觀賞するわれわれも、川がないと、風情（ふぜい）が感じられず、【 E 】を覚えます。

フタをされてしまった川は、東京のいたるところにあります。私の生まれ育った場所のそばにも、千川上水が流れていました。千川上水は、\*玉川上水を⑥スイゲンとして、\*城北地域へと流れる総延長約二二キロメートルの用水路でした。この千川上水の暗きよ化がほぼ終了（しゅうりょう）したのが一九七〇年。私の物心がつくころには、この上水はコンクリートのフタの下を流れ、名所であった桜並木が（2）所在（ざい）なげに立っているだけでした。

この千川上水からフタを外し、また清流の流れる水辺を整備したらどうか、という意見が豊島区に出されたことがあります。一時は、



千川上水復活事業をおこなうことが決定したのですが、工事費が高く、財政上、事業の執行（しつこう）が困難であるとして、計画を断念しました。いま、地下にうめられた千川上水の上はアスファルト道路になっており、車が行き来しています。

私は、この道路の下に流れている川はとも「F」だと思っています。一日でも早く、排気ガスをまきちらす自動車のためだけに使われている道路を撤去（てつきよ）し、思い切り日光を浴びさせ、そしてメダカや小ブナが泳げるような、もとの川にもどしてあげたいと思います。

このようなかんがえは、非現実的な\*ロマンチストのものでしかないと思うでしょうか。いや、世界に目を広げれば、（3）そのようなかんがえが現実のものとなった例もあるのです。東京のような大都市で、地下を流れていた川のフタを外して、地上に復活させた例があります。それは、とんりの韓国（かんこく）の首都であるソウルのチョンゲチョン（清溪川）です。

清溪川はソウルの都心を東西に流れる都市河川（かせん）でした。しかし、一九七一年にはフタがされ、さらにその上には高架（こうか）の高速道路が通されました。その結果、ソウルの市「G」一、そしてソウルの市民「H」一からも清溪川は消えてしまったのです。

元ソウル市長であり、その後⑦タイトウリヨウになった李明博

（イ・ミョンバク）氏は、ソウル市長に立候補したとき、公約として、この忘れ去られた清溪川におおいかぶさっている高速道路とフタをとりはずし、ソウル市に新しいいいいの場をつくりだすだけでなく、断絶されたきおくをとりもどすことを約束したのです。李氏は市長に当選すると、公約どおり、清溪川の復元事業にとりかかります。

そして二〇〇五年一月一日、川の上をおおっていた高速道路を撤去し、フタをとり、清溪川はふたたびその姿をソウル市民の前にあらわしたのです。

ソウルに新しく出現した川という自然に、ソウル市民は大喜びしました。川が復元したことで、ここを訪れた人は初年度だけで三〇〇万人を数えました。これは、東京デイズニー・リゾートの年間来園者数よりも多い数字です。清溪川を再生したことで、周囲の土地の値段は\*高騰（こうとう）しました。それまでは高速道路という、騒音（そうおん）や排気ガスをまきちらし、しかも日かげをつくり、景観的にも醜悪（しゅうあく）な巨大（きょだい）な土木構造物があったのが撤去され、そのかわりに緑でいろどられた川があらわれたのです。騒音のかわりに川のせせらぎ、排気ガスのかわりに水辺の植物が出す酸素、みにくい土木構造物のかわりに詩情あふれる水流の景観におきかわったのですから、土地の価値が高まるのはとうぜんかもしれません。

しかし、この事業の最大の⑧コウセキは、（4）都市のうもれて

しまったきおくをよみがえらせたことでしょう。つまり、ソウルの歴史の流れを再（ふた）びよおし、現代へと紡（つむ）いだことです。清溪川の再生は、ソウルの失われた\*アイデンティティを発露（はつろ）することに成こうしたのです。それは、ソウルがいまのように巨大になる前からもっていた\*DNAともいえる、川の流れという自然です。

服部圭郎の文章による

- \*玉川上水 江戸時代につくられた上水道のひとつ。
- \*城北地域 ここでは東京都の北部のこと。
- \*ロマンチスト ここでは現実ばなれした空想などを好む人。
- \*高騰 物価などがひどく上がること。
- \*アイデンティティ 主体性。特定の人、ものであること。
- \*DNA ここでは街の基本的なせつけい図のこと。

問一 ぼう線①から⑧のカタカナの部分の漢字に直しなさい。

問二 「A」に入る最も適当な一文を次から一つ選び、

その記号を書きなさい。

- ア つめたくなっておいしくなった気がしました
- イ よりいっそうあまく感じるようになりました
- ウ あまりおいしくなくなったような気がしました
- エ なぜだか不思議と食べたくなる気がしました

問三 「B」に入る「春の小川」の歌詞をひらがな四字で書きなさい。

問四 波線（1）について、人々はなぜ川が存在を忘れてしまうのですか。筆者のかんがえをふまえて三十字以上四十字以内で書きなさい。

問五 「C」に入る慣用句を書きなさい。

問六 「D」「E」「F」にそれぞれ当てはまる言葉として最も適当な組み合わせを次の中から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア D Ⅱくるしい E Ⅱきびしさ F Ⅱしずかだ
- イ D Ⅱかなしい E Ⅱかなしさ F Ⅱ得意げだ
- ウ D Ⅱわびしい E Ⅱさびしさ F Ⅱみじめだ
- エ D Ⅱかなしい E Ⅱきびしさ F Ⅱみじめだ

問七 波線（2）「所在な」の意味として最も適当なものを次から一つ選び、その記号を書きなさい。

- ア 存在がわからない
- イ 行き場がない
- ウ 意気込みがある
- エ 持て余している

問八 波線（3）「そのようなかんがえ」の内容を、六十字以上七十字以内で書きなさい。

問九 「 G 」「 H 」に当てはまる適当な言葉をそれぞれ文章中から探し、三字以内で書きなさい。

問十 波線(4)と同じ意味で用いられている別の表現を文章の中から探し、十六字で書きなさい。



[illegible][illegible]

受験番号